

富山県福光町

梅原胡摩堂遺跡群 II

1995年3月

福光町教育委員会

序

本書は県営農道整備事業（田中梅原線）に伴う発掘調査の結果をまとめたものです。

この道路は梅原胡摩堂遺跡群の中を通過しており、整備工事で遺跡が破壊されるおそれがあったため発掘調査を実施しました。その結果、砺波地方では珍しい弥生時代中期の土器・石錠・管玉が出土しました。また奈良時代と戦国時代の建物跡も発見されるなど多くの成果がありました。

本書を出土品とあわせて、郷土の歴史の解明や学術研究等に活用していただければ幸いです。

この調査の実施にあたり、多大なご協力を賜りました富山県文化財センター・福光町シルバー人材センター・富山県農林水産部及び地元住民の方々に深く感謝申し上げます。

平成7年3月

福光町教育委員会
教育長 吉江 正二

例　　言

- 本書は、県営一般農道整備（田中・梅原地区）に伴う富山県福光町梅原胡摩堂遺跡の発掘調査概要である。調査は、平成6年10月27日から同年12月6日までである。梅原胡摩堂遺跡2か所の調査面積はあわせて520m²である。
- 調査は、富山県農林水産部の委託を受け、福光町教育委員会が実施した。調査にあたっては、富山県埋蔵文化財センターから調査員の派遣を受けた。
- 調査事務局は福光町生涯学習課におき、文化係長鳥越知証が調査業務を担当し、教育次長兼生涯学習課長飯田滋が總括した。調査担当者は富山県埋蔵文化財センター主任久々忠義・同文化財保護主事境洋子である。
- 本書の執筆は、富山県埋蔵文化財センターの協力を得て調査担当者が行なった。執筆分担は各文末に記した。
- 発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々の協力・助言があった。記して謝意を表す。
河西健二・狩野暉・斎藤隆・島田修一・神保孝造・太崎勇・大門秀敏・林敏三・前田広・前田敏久・松本透・溝口博文・宮田道一・桃野真晃・吉田敏信（敬称略・五十音順）
- 本書で使用した方位は東北である。上層の觀察には、小出正志・竹原秀雄編著1967「新版標準土色帖」日本色研事業株式会社を用いた。

目　　次

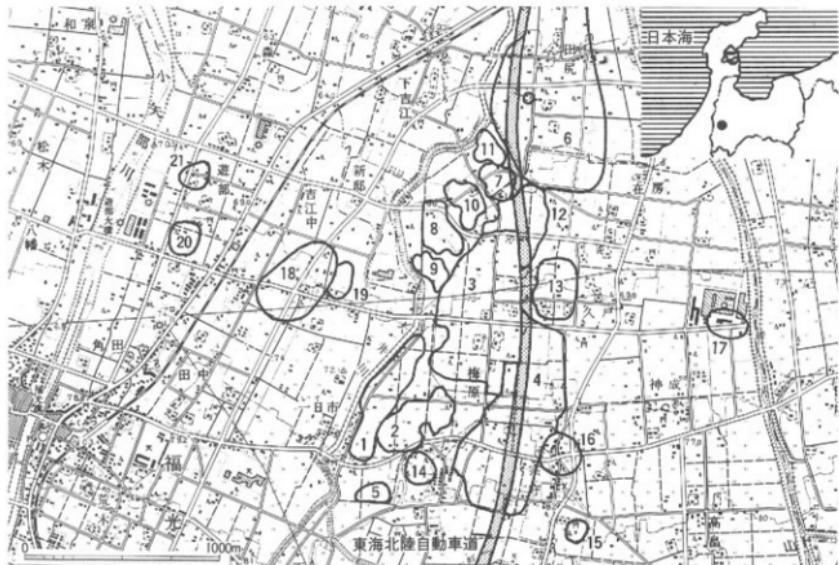
I 位置と環境	1	第12図 8地区出土遺物図(3)	17
第1図 位置と周辺の遺跡	1	第13図 8地区出土遺物図(4)	18
II 調査にいたる経過	2	図版1 7地区の遺構(1)	
第1表 事業計画地内遺跡一覧	2	図版2 7地区の遺構(2)	
第2図 遺跡の範囲と発掘調査位置	3	図版3 8地区的遺構(1)	
III 調査の概要	4	図版4 8地区的遺構(2)	
1 調査の経過	4	図版5 8地区的遺構(3)	
2 調査の方法	4	図版6 8地区的遺構(4)	
第3図 7・8地区的地形と区割	4	図版7 8地区的遺構(5)	
3 7地区的概要	5	図版8 8地区的遺構(6)	
4 8地区的概要	5	図版9 8地区的遺構(7)	
第4図 8地区的基本層序	5	図版10 7地区的遺物	
IV まとめ	8	図版11 8地区の遺物(1)	
参考文献	8	図版12 8地区の遺物(2)	
第5図 7地区全体図及び遺構断面図	9	報告書抄録	
第6図 7地区出土遺物図	10		
第7図 8地区遺構図(1)	11		
第8図 8地区遺構図(2)	12		
第9図 8地区的遺構配置図	13		
第10図 8地区出土遺物図(1)	15		
第11図 8地区出土遺物図(2)	16		

I 位置と環境

梅原胡摩堂遺跡は、富山県西砺波郡福光町梅原・久戸・宗守地内に所在する。福光町は、富山県の西南端に位置し、西は719年（養老3年）に泰澄大師によって開かれたと伝えられる匠王山がそびえ石川県との境をなし、南は大門山が石川県と東砺波郡上平村との境をなす。この大門山を源として富山県の7大河川の一つ小矢部川が同町を南北に貫流する。当遺跡は、その支流である大井川と山田川に挟まれた山田川左岸段丘上に位置し、標高は67m～78mである。その周囲には梅原安丸・梅原出村・梅原落戸・梅原上村・梅原加賀坊・久戸・田尻の各遺跡があり近接している。

周辺には繩文時代の遺跡である竹林I・竹林II・うずら山・東殿・徳成遺跡があり、南後方の立野ヶ原台地には旧石器時代から縄文時代にかけての遺跡群がある。弥生時代のものは、今回調査をした梅原胡摩堂遺跡の6・7地区があり、弥生時代中期の土器・石鏃・管玉が出土した。古墳時代のものは、梅原安丸Ⅲ遺跡で竪穴住居跡が1棟検出されている〔福光町教委1991・1994〕。古代には、福光町の一部が砺波郡川上郷に含まれていたとされている。この川上郷に関しては、平城宮東院の南東隅付近の坊間大路の西側溝から出土した木簡に「(表)越中国利波郡川上里鰐雜」、「(裏)腊一斗五升和銅三年(710)正月十四日」とあり、川上里(蠻龜元年(715)に川上郷に改称)から鮭などの干し肉を貢納していたことがわかっている。その後11世紀には円宗寺領石黒庄が成立し、当地域はそのうちの山田郷の一部に比定される。当調査地区の西側では東海北陸自動車道建設に伴う発掘調査により12世紀中頃～18世紀の大集落跡が発見された〔富文振1994〕。その後は閑静な農村地帯として続いたが、大正12年～昭和初期に、は場整備が実施された。このような歴史的経過を経て梅原地区の地形は大きく変化している。

(境 洋子)



第1図 位置と周辺の遺跡

1. 梅原出村Ⅲ遺跡
2. 梅原上村遺跡
3. 梅原落戸遺跡
4. 梅原胡摩堂遺跡
5. 梅原出村Ⅱ遺跡
6. 田尻遺跡
7. 梅原安丸遺跡
8. 梅原安丸Ⅱ遺跡
9. 梅原安丸Ⅲ遺跡
10. 梅原安丸Ⅳ遺跡
11. 梅原安丸Ⅴ遺跡
12. 梅原加賀坊遺跡
13. 久戸遺跡
14. うずら山遺跡
15. 宗守城跡
16. 宗守遺跡
17. 久戸東遺跡
18. 佐伝寺跡
19. 田中遺跡
20. 常楽寺跡
21. 遊部城跡

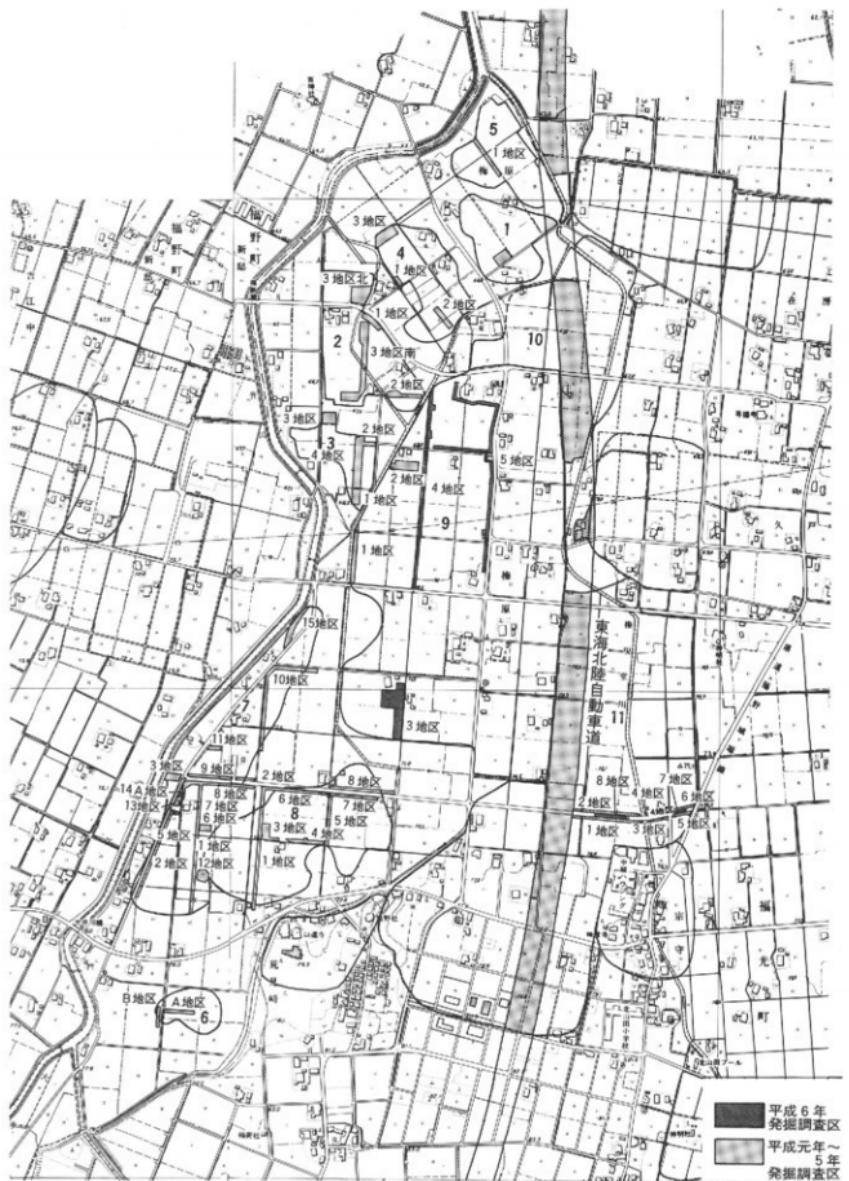
II 調査にいたる経過

遺跡の所在する梅原地区においては、平成元年度（1989年）に将来の大型農業に対応するための「低コスト化水田農業大区画は場整備事業計画」が策定された。同事業計画地内には、東海北陸自動車道建設に伴う発掘調査で遺跡の存在が知られていたことから町教育委員会は、県埋蔵文化財センターの協力を得て平成元・2年度に計画地内の分布調査を実施し、併せて22地区（内17地区が新発見）の散布地を確認した。平成2年度には国庫補助を受け試掘調査で範囲を確認し、県農地林務部・県教育委員会・地元土地改良区と遺跡の保護措置の協議を重ねた。その結果、遺跡群の大半は水田下に保存する計画に変更し、一部の面工事・農道建設・用排水路部分については本調査を実施している。

農道田中・梅原線は、は場整備事業区域の南側にある農道である。同は場整備事業にあわせて現道を改良し幅4mを7mに拡幅するものであるが、は場整備事業に伴う調査で、農道部分にも遺跡の広がりが確認されたため、平成4年度より本調査を実施してきた。今回の調査は、平成5年度に実施した同遺跡の農道拡幅部分の調査において、現道下への遺構のつながりが判明したため、県農林水産部（平成6年度当初に機構改革）・県教育委員会・地元土地改良区と協議を行い、現道下を調査するにいたったものである。（第1表、第2・3図）
 (境 洋子)

第1表 事業計画地内遺跡一覧（Noは第2図の番号を示す）

No	遺跡名	所属時代	立地	発見された遺構	発見された遺物	備考
1	梅原安丸	縄文、中世、近世	水田・畑地	圓柱建物柱穴、穴、溝、堅穴状遺構、井戸、池底遺構	土師質土器、珠洲焼、磁器、漆器、五輪塔、石臼、下駄	H. 3、1地区本調査
2	梅原安丸II	縄文（後期）、古代、中世、近世	水田	圓柱建物、圓柱穴、溝、井戸、土器溜まり	縄文土器、石器、須恵器、漆器、土師質土器、珠洲焼、陶磁器	H. 2、H. 3 4地区本調査
3	梅原安丸III	縄文（後期）、古墳、古墳、中世、近世	水田	堅穴式居跡（古墳）、圓柱建物、柱穴、穴、溝、井戸	縄文土器、石器、須恵器、土師器、土師質土器、珠洲焼、陶磁器	H. 2、H. 3 4地区本調査
4	梅原安丸IV	縄文か、古代、中世、近世	水田・宅地	圓柱建物柱穴、穴、溝、堅穴状遺構、井戸	縄文土器、須恵器、珠洲焼、土師質土器、陶磁器	H. 2 2地区本調査
5	梅原安丸V	縄文か、古代、中世、近世	水田	圓柱建物、圓柱建物柱穴、穴、溝、井戸	縄文土器、須恵器、珠洲焼、土師質土器、陶磁器、鼎物底板	H. 2 1地区本調査
6	梅原出村II	縄文（晚期）、古代～中世	水田	柱穴、穴、溝	縄文土器、石器、須恵器、土師質土器、珠洲焼、銅貨、銅製牛セル	H. 4 1地区本調査
7	梅原出村III	印石群、縄文（前、後、晚、中期？）、古墳～中世、近世、近代？	水田・宅地	柱穴、穴、堅穴式居跡、溝、井戸、遺物包含層（縄文、古代）	縄文土器、石器、須恵器、土師器、土師質土器、珠洲焼、鐵燒、陶磁器、銅貨	H. 4 2地区本調査
	縄文（前、中、後期）古墳、古代～中世、近世、近代？	水田・宅地	穴、溝、井戸、遺物包含層（縄文）	縄文土器、石器、須恵器、土師器、土師質土器、珠洲焼、鐵燒、陶磁器、銅貨	H. 5 3地区本調査	
8	梅原上村	縄文、古代～中世、近世	水田・宅地	柱穴、穴、溝、遺物包含層（古代）	縄文土器、石器、須恵器、土師器、珠洲焼、鐵燒、八尾燒？陶磁器、古鏡	H. 4 2地区本調査
	縄文（中、後期）、古代～中世、近世	水田・宅地	穴、溝、井戸、遺物包含層（古代）	縄文土器、石器、須恵器、土師器、土師質土器、珠洲焼、鐵燒、八尾燒？陶磁器、古鏡	H. 5 6地区本調査	
9	梅原落戸	縄文（後、晚期）、弥生、古代、中世、近世	水田・宅地	川、穴、遺物包含層（縄文）、圓柱建物（含倉庫）土坑（古代）	縄文土器、石器、浮士土器、内裏土器、青瓷、滑石器、土師器、土製品、珠洲焼、馬糞、淡化半釉、種子、骨片、木製品（古代）、土師質土器、珠洲焼、鐵燒、陶器、骨片、木製品、鐵燒、漆器、漆桶、銅鏡（中世）	H. 5 2地区本調査 H. 6 3地区本調査
10	梅原加賀坊	縄文、古代、中世、近世	水田・畑地・宅地		縄文土器、須恵器、土師器、土師質土器、珠洲焼、磁器	
11	梅原胡摩堂	縄文（後、晚期）、弥生、古墳、古代、中世、近世	水田・畑地・宅地	穴、遺物包含層（弥生）、圓柱建物、溝（古代）、井戸、溝、穴（中世）、柱穴、穴	縄文土器、石器、先生土器、石燒管玉、制胎（弥生）、須恵器、土師器、珠洲焼、鐵燒、鐵燒、輪入陶器、土製品、木製品、漆器、漆桶、銅鏡（中世）、陶磁器、鐵製品	H. 5 6地区本調査 H. 6 2地区本調査



第2図 遺跡の範囲と発掘調査位置 ($S = 1/10,000$) 遺跡番号は第1表に対応

■ 平成6年
発掘調査区
■ 平成元年～
5年
発掘調査区

II 調査の概要

1 調査の経過（第2・3図）

今回の調査地区は、平成5年度に調査した1・2地区の西側と5・6地区の間に挟まれた現道路下である。5・6地区の間を7地区、1・2地区の間の西側を8地区とする。調査面積は、7地区が130m²、8地区が390m²である。

2 調査の方法（第3図）

現道下の調査になるため、まず重機で舗装面とその路床・旧表土の除去を行った。その後各地区ごとに調査区の形に応じて東西方向・南北方向とともに5mごとに基準杭を設置し、南から北方向にX軸、西から東方向にY軸を設定し、2mを一区画としてアラビア数字でその位置を示した。

包含層の掘削・遺構検出・遺構掘削等は調査員と作業員が行い、遺構平面図の作成はラジコンヘリコプターにより撮影した写真から図化した。
（境 洋子）



第3図 7-8地区的地形と割区 (1/20,000)

3 7地区の概要

(1)地形と層序（第5図）

7地区は、道路で高くなっているが、その北と南は海拔約75mの水田である。調査区の中央は深さ80cmのくぼ地となっている。堆積土層は9層あり、①・③層は耕土および旧耕土で、②・⑥層は黒色土で古代の遺物を含んでいる。④・⑤・⑦層も黒色土であるが、弥生時代以降に堆積したと考えられる。⑥層と⑦層を比較すると、⑦層が真黒なのに対し⑥層のほうはわずかに赤みをおびている。⑦層には弥生時代の刺片が多く含まれている。⑧・⑨層は地山にいたる漸移層である。

(2)遺構（第5図、図版1・2）

穴P 1～6と風倒木痕と思われるものがある。穴は径32～40cm深さ12～50cmである。深さも並びも不揃いであり建物の柱穴ではない。風倒木3は、覆土の①層が基本土層の⑦層と同じで、その中から、弥生時代の石鏡1、スクレイバー1、多くの刺片、管玉が出土した。

(3)遺物（第6・7図、図版10）

縄文時代後期・晩期、弥生時代中期、平安時代、中世のものが整理箱（縦64cm横40cm深さ10cm）で8箱ある。第7図に、遺物の出土地点を時代毎にドットで示した。平安時代の遺物は量が多く、北側で多く出土した。弥生時代の遺物は南寄りにみられ、調査区南方にこの時代の集落が立地するらしい。

A 縄文時代（第6図、図版10）

縄文土器1・2、打製石斧がある。1は口縁部にB字状突起がある深鉢で、晩期中葉の中尾式にあたると考えられる。2は無文の鉢で、後期後葉である。

B 弥生時代（第6図、図版10）

弥生土器3・4、石鏡6・7、スクレイバー、刺片、管玉5がある。3は表の口縁部で、粗いハケメ調整をほどこした後になんでる。端部には棒状具を押しあて波状にしている。4も表の口縁部で、細かいハケメ調整を行い、端部に棒状具を押しあてて波状にしている。5は緑色凝灰岩（碧毛）製の管玉である。長さ6mm径2mm穴の径1mmで半分に割れている。風倒木痕3の覆土を水洗して見つかった。6は長さ3.3mm厚さ0.6mmの鉄石英の石鏡、7は残存部の長さ3.8mm厚さ0.6mmの泥岩製の石鏡である。細部の加工が途中であるので、未完成である。スクレイバーは幅3.2cm厚さ1cmの泥岩製である。刺片はチップも含めて約60点あり、鉄石英、凝灰岩、緑色凝灰岩などがある。

C 平安時代（第6図、図版10）

須恵器の杯蓋8～14・杯17・高台杯18・襄19、土師器の杯20・小型襄21～28がある。時期は9世紀前半と考える。

D 中世（第6図、図版10）

土質質小皿29・白磁口はげの皿30がある。前者は15世紀、後者は13世紀と考える。

（境 洋子）

4 8地区の概要

(1)地形と層序（第3・4図）

8地区は、現況は道路で高くなっているが、その北と南は海拔約75mの水田である。東側には権現堂川が流れている。調査の結果、調査区西側では地山面が西へ向かって傾斜しており、もとは川にはさまれた高地である。地山に起伏があるので、水田面から黄色土の地山面までの深さは0～70cmである。西端ではその間は3層にわかれれる。①層は現代の耕作土、②層は黒色土で古代の遺物を含む。

③層は茶褐色土で縄文時代後期の土器が含まれる。

1層 耕土（現代）
2層 黒色土（古代・中世）
3層 茶褐色土（縄文）
4層 黄色土（地山）

第4図 8地区の基本層序

(2)遺構（第7～9図、図版3～9）

奈良・平安時代の掘立柱建物1・溝4・土坑・穴3、中世の掘立柱建物1・溝6・井戸10・穴がある。

A 奈良・平安時代（第7～9図、図版3～6）

掘立柱建物SB01（第7図） 調査区東寄りにある掘立柱建物である。溝で壊れている部分が多いが、4間（7.4m）×2間（4.6m）の南北棟建物で、床面積は約34m²である。棟方向は真北から16度西へふれている。柱間寸法は、梁行は1.8mになるらしいが、南側一間は2mでやや広い。桁行は2.3mである。柱穴の掘方は一辺60～70cmの方形で、深さは約20cmである。柱は残っていないが、柱穴の土層の違いから、柱の太さは18～20cmほどあったと推定できる。遺物はP7・P10から土器部類が出土した。時期は8世紀後半と考える。

溝SD02・07～09（第7図） 溝は調査区中央から東側にある。いずれも東南から北西へ向かう。調査区東南方向で権現堂川から取水する用水路と考えられる。SD05は、中世以前の風倒木痕の連続したものである。SD02は幅約50cm深さ約20cmである。SD07はSB01の東にありその柱穴を切っている。幅約60cm深さ約50cmで断面が箱型をしている。SD02とは約20mの間隔をおいて同じ方向を向く。時期は8世紀末～9世紀初めと考える。SD08はSD07の東にある。SD02・07よりやや北向きである。幅2.6～4m深さ50cmで両側の立ち上がりも緩やかな大溝である。最下層は黄褐色の細かい砂礫層で、遺物の多くはその砂礫に混じっていた。時期は9世紀中頃と考える。SD09はSD07の東にある。幅約1m深さ50cmで断面がV字状をしている。時期は8世紀後半と考える。

土坑SK04・07・P7（第9図） SK04は、SD07と08の間にある土坑である。一辺90cm深さ約20cmである。時期は9世紀前葉と考える。SK11は、SB01の北東隅柱のあったところの東に接する土坑である。昨年度の調査区で分割されたが、幅約1m長さ約2m深さ30cmほどの長円形をしている。時期は8世紀末～9世紀初頭と考える。P7は、調査区西側にある唯一の穴である。幅30cm長さ1.1m以上深さ3cmの溝状である。覆土は黄色砂礫であった。この場所は谷地形の中であり、そこは古代においては水の流れる川であった可能性がある。時期は8世紀後半とみる。

B 中世（第8・9図、図版3～9）

掘立柱建物SK05・07・08・P11と周辺の柱穴SK06・P9・16・17・24（第8・9図） 調査区西寄りにある。柱根はないが、4本の柱を基本とする掘立柱建物があったと考える。桁行を考えるSK05とSK07、P11とSK08・09との柱間寸法は4～5m、梁行を考えるSK05とP11とSK07とSK08・09の柱間寸法は3.5mである。棟方向は真北から西へ76度ふれた東西棟建物である。柱穴は一辺1～1.2m深さ0.4～1mの大きなものである。覆土は青色と灰色の地山土の混じったもので、その中に柱根痕跡とみられる黒色土があった。黒色土は径20～30cmであり、柱の大きさがほぼそのくらいであったことが推測できる。掘立柱建物のまわりには、この建物の一部とみられる柱穴がある。SK06・P25は4本柱と同じ大型柱穴、P9・16・24は径50cm前後の小型柱穴である。SK06は、中央に径20cmほどの柱根痕跡がある。P25は柱に使われたとみられる木の皮が残っていた。P9は径約10cmの柱根が残っており、埋土にはこぶし大の川原石が入っていた。P16は底に礎石とみられる厚さ5cmほどの平坦な石が敷かれていた。P24はなかに太さ18cm長さ約60cmの柱根が残っていた。

井戸SE01～04・06～08・SK02・P3（第8図、図版8・9） SE01は径80cm深さ1.2m、SE02は径95cm深さ1.3mで、いずれも底は礎層を掘り込んでいる。覆土は、地山土の混じりのない黒色土である。SE01は中世土器と桶・鉢身・曲物・漆器、SE02は中世土器と曲物底板が出土した。時期は15・16世紀と考える。SE03は径80cm深さ1.1m、SE04は径80cm深さ1.2mで、ふたつは重なりがあるがSE03が新しい。いずれも底は礎層を掘り込んでいる。覆土は灰黒色であるが、SE04は上部に人頭大の石、底には人頭大と小砂利の石が多かった。SE04の時期は16世紀である。SE06は径55cm深さ1mである。SE07は径80cm深さ70cm、SE08は径60cm深さ80cmで、底は礎層まで届かない。覆土は灰黒色で、黄色または白色の地山上が混じる。遺物はない。SK02は径1.3m深さ1.4mの大きなもの、覆土は黄

灰色土である。時期は16世紀である。P 3は、径55cm深さ1m、深さ60cmのところで段でなし、一番底では径20cmほどの狭い井戸である。覆土は黄灰色である。

溝S D01・03・04・05・10・11（第7～9図） 調査区中央から西寄りにある。S D01は東から西へ向かうが、その他は南から北へ向かい、現在の地割方向と同じである。S D01は、幅約2m深さ約50cmで壁面の立ち上がりは急である。溝の東は地山の壁面があるが、溝の西側はもと川であったため川の埋土を掘りこんでいる。西壁断面にその様子がみえる。川の埋土は軟弱なため、護岸工事が行われていたらしい。P 5・6・22・24の柱穴はS D01の北壁に沿って並んでおり、その中には径10～15cmの柱根が残っていた。護岸に使われた板を支える支柱と思われる。時期は、15世紀後半には埋まっていたものと考える。S D03は、幅1.1m深さ20cmで、覆土にはこぶし大の川原石が多く含まれていた。詳しい時期はわからない。S D04は、幅2.3m深さ1.1mで底が平坦な大溝である。底から柄杓底板が出土した。時期は15世紀後半と考える。S D06は、幅1.1m深さ10cmである。詳しい時期はわからない。S D10は幅35cm深さ9cm、S D11は幅50cm深さ5～10cmである。方向と出土土器から中世であるが、詳しい時期はわからない。

その他の穴（第8図） P 14・15は径50～60cm深さ40～50cmで、覆土は黄白色土と茶色土の混じり土である。P 8は径60cm深さ15cmの穴で、中から下駄が出土した。P 23は、径20cm深さ40cmで、太さ20cmの柱根があった。柱根はP 27でも残っていた。S K10は、径70～80cm深さ35cm、覆土が黒色土の七坑である。

③遺物（第10～13図、図版11・12）

縄文時代後期、奈良・平安時代、中世、近世のものが、整理箱で21箱出土した。

A 縄文時代（第10図、図版11）

縄文土器31～36、打製石斧38・39、たたき石40、石鎚未成品41がある。31は波頂部がゆるやかで、口縁部と胴部に沈線を巡らす。波頂部下には三叉文がある。後期末の八日市新保II式にあたると考える。32は口縁部に弧状降帶を巡らす深鉢である。隆帯のうえには角状列点文が施される。33は内湾する口縁部に平行沈線が巡る。浅鉢か。36は纏沈線がある。深鉢である。34・37は磨消縄文のある深鉢である。35は縄文の深鉢である。32は後期末の串田新II式、33・34・37は後期前葉の気屋式と考えられる（狩野睦氏の教示による）。31を除くその他の土器は、風倒木痕S D05からの出土である。41は基部の加工が行われていないので、石鎚の未成品と思われる。鉄石炎製である。

B 奈良・平安時代（第11図、図版11）

撲立柱建物S B01（第11図） P 7から土師器壺101が出土した。口縁端部は角張る。8世紀後半とみる。

溝S D07～09（第11図） S D07は須恵器杯64、土師器壺65がある。65の口縁部が三角に尖る特徴から8世紀末に位置づける。S D08は、須恵器杯蓋66～68・高台杯69・70・杯71・碗72・壺73・横瓶74・双耳瓶75・76、土師器碗77～80・壺・小型甕81～88がある。須恵器杯蓋67は口縁端部がまるく、杯71は底部が平坦である。土師器碗79・80は内墨土器である。上師器甕は、口縁端部が立つ83・85・87や、立って内傾する84・86がある。以上は、吉倉B遺跡S I 33の出土土器と同じ様相であり、9世紀中頃に位置づける（県理文1994）。S D09は、須恵器杯蓋89・90・杯91～93・壺94がある。口縁端部は角張る89・90、杯の底部との境が丸い91などから、8世紀後半と考える。S D08・09の上の包含層から須恵器杯95・96・碗97、土師器甕98・99・製塩土器100が出土した。

土坑S K04・07・11・P05・07（第11図） S K11から土師器甕102、S K04から土師器壺103、P 07から須恵器高台杯104、土師器甕105が出土した。P 07は8世紀後半、S K04・11は8世紀末から9世紀前葉とみる。S D01の護岸支柱とみるP 05から須恵器甕123が出土しているが、P 07のものが混じったものであろう。

C 中世（第10～13図、図版11・12）

撲立柱建物S K05・07・08・P11と周辺の柱穴S K06・P9・16・17・24・25（第13図） S K05から土師質小皿108、S K07から土師質小皿110、珠洲甕112、瀬戸美濃鉄釉天目茶碗111、瓦器113、P 11から土師質小皿118、S K06から伊

万里茶碗、P19から珠洲窯119・木製容器131、P25から土師質小皿が出土した。土師質小皿は、井口城跡や弓庄城跡から出土するものと同じであることから、掘立柱建物は15世紀後半～16世紀に作られたものと考えられるが、伊万里茶碗が混入でなければ、包含層から越中瀬戸小皿125が出土していることもあります、17世紀初めまで使われていた可能性がある（井口村教委1990・上市町教委1985）。木製容器131は平面が円形の剥物で、口縁部は印籠抉りとなっていて蓋が付く合子である。底部は低い高台がつく。

井戸 S E01・02・04・S K02（第12・13図） S E01から、珠洲窯60、漆器127、鍼身130、桶の側板129、曲物の底板か蓋128が出土した。60は珠洲編年第VI期（15世紀後半）である（珠洲1989）。127は内外面に黒漆を塗り、その上に高台部を残して体部内面と外面に赤漆を重ね塗りするもので、いわゆる根木塗りの皿である。130は側邊にU字形の鉄刃を装着するためのえぐりがあるいわゆる風呂銀である。128は周囲に側板を取り付ける溝がある。S E02から土師質小皿106、曲物底板134が、S E04から瀬戸美濃鉄釉天目茶碗114、土師質蓋115、珠洲窯116、木製蓋135が、S K02から土師質小皿107が出土した。これらの井戸は、いずれも15世紀後半から16世紀につくられたもので、掘立柱建物に伴うものと見てよい。

溝 S D01（第10図） S D01から須恵器杯蓋42・杯43、土師質窓44・45、土師質小皿46～56、珠洲すり鉢57・壺58・59が出土した。須恵器・土師器は8世紀末から9世紀初のもの、土師質小皿46～49・51・53・54は13～15世紀前半、珠洲すり鉢57は13世紀のものである。土師質小皿52・50・55・56は、15世紀後半のものである。その他の溝は詳しい時期がわかるものはないが、溝の方向などから16世紀のものと推定する。

土坑 S K10・P04・08・包含層（第12・13図） S K10から土師質小皿120・121が出土した。S D01の時期は14～15世紀とみられるので、S D01のものが混じったものであろう。P04から青磁碗122、P08から下駄133が出土した。下駄133は、上市町弓庄城跡S D1002出土のものに似ており、16世紀のものである（上市町教委1985）。西の掘立柱建物付近の包含層から、青磁124、越中瀬戸小皿125、珠洲壺126が出土した。

（久々忠義）

IV まとめ

1 繩文時代中期・後期・晩期、弥生時代中期・奈良・平安時代・中世・近世の遺物が出土し、奈良・平安時代の住居・水路、中世の住居・井戸・水路が発見された。

2 7地区では、弥生時代中期の土器・石鏃・剝片・管玉が出土した。弥生時代中期の遺物は、小院瀬見野地島・立野ヶ原古地の南原・西山B・立美A・南原F・立野新Jなどの山寄りの遺跡から発見されているが、平野部ではこれが最初である。この発見によって南砺地域での稻作の開始が、約2,000年前に遡ることが推測できる。

3 8地区では、奈良・平安時代の掘立柱建物・水路が発見された。東海北陸自動車道関連の発掘調査では、この時期の遺構は奈良時代の土坑1があるだけである。一方県営は場整備事業関連の調査では、梅原落戸遺跡などこの時期の遺物・遺構が多く発見されている。東海北陸自動車道の通る段丘中央部は、奈良・平安時代にはまだ開発の手が及ばなかったらしい。この地域の水田開発は、大井川や権現堂川などの川沿いから始まったことがわかる。

4 8地区では15～16世紀の建物・井戸・水路が発見された。東海北陸自動車道関連の発掘調査では、この時期、梅原地区には整然とした町並があったことがわかった。その性格については、真宗寺院梅原坊を中心とした門前町が想定されるが、今回の建物はその一例にあたるものである。

（久々忠義・境 洋子）

参考文献

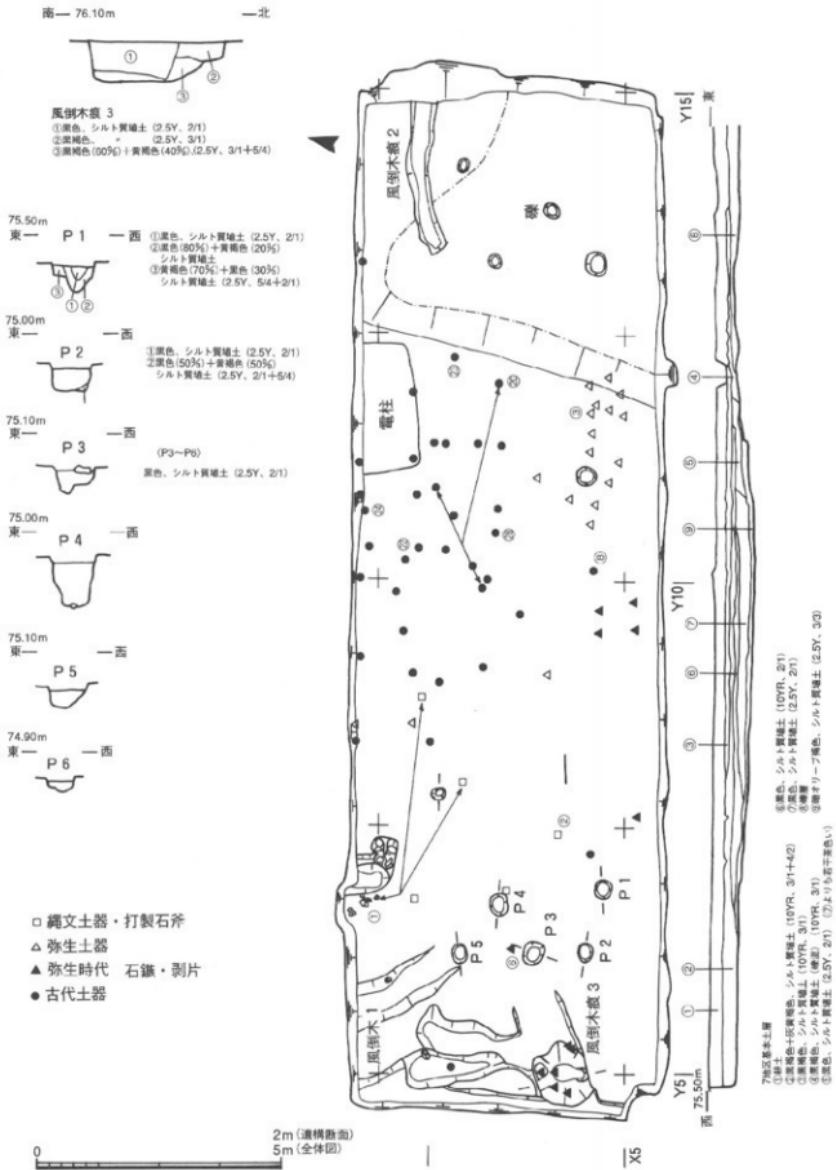
福光町教育委員会 1994 「富山県福光町梅原上村遺跡群II・梅原胡摩堂遺跡群I」

上市町教育委員会 1985 「富山県上市町弓庄城跡第5次緊急発掘調査概要」

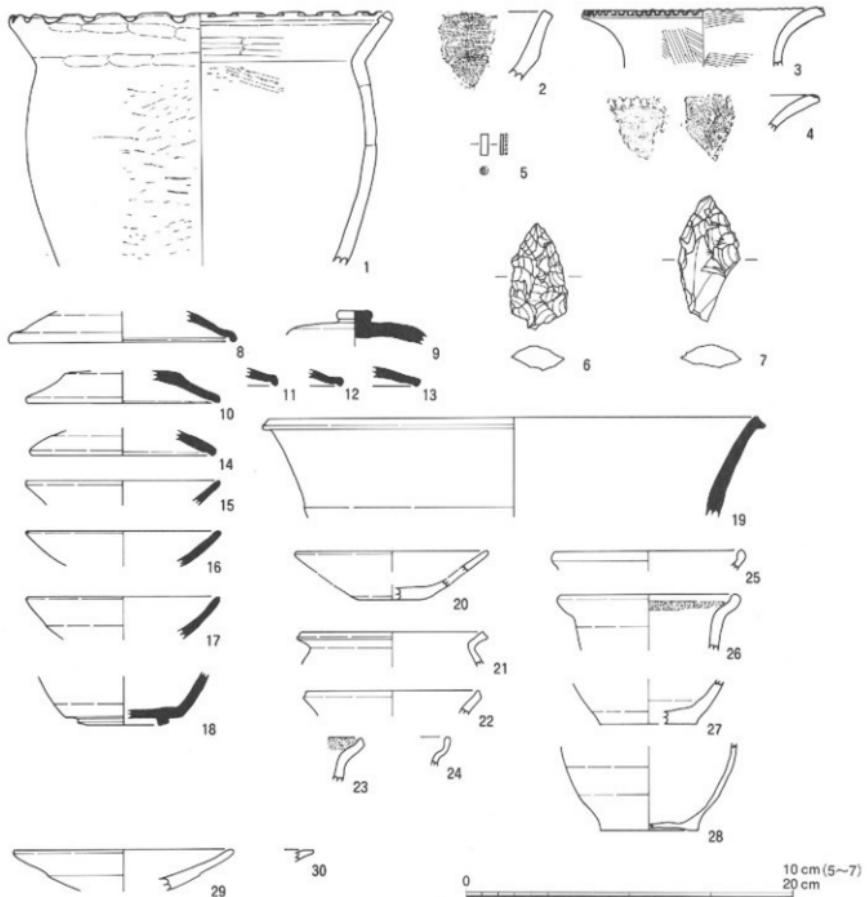
井口村教育委員会 1990 「井口城跡発掘調査概要」

富山県埋蔵文化財センター 1994 「富山県総合運動公園内遺跡発掘調査報告(4)」

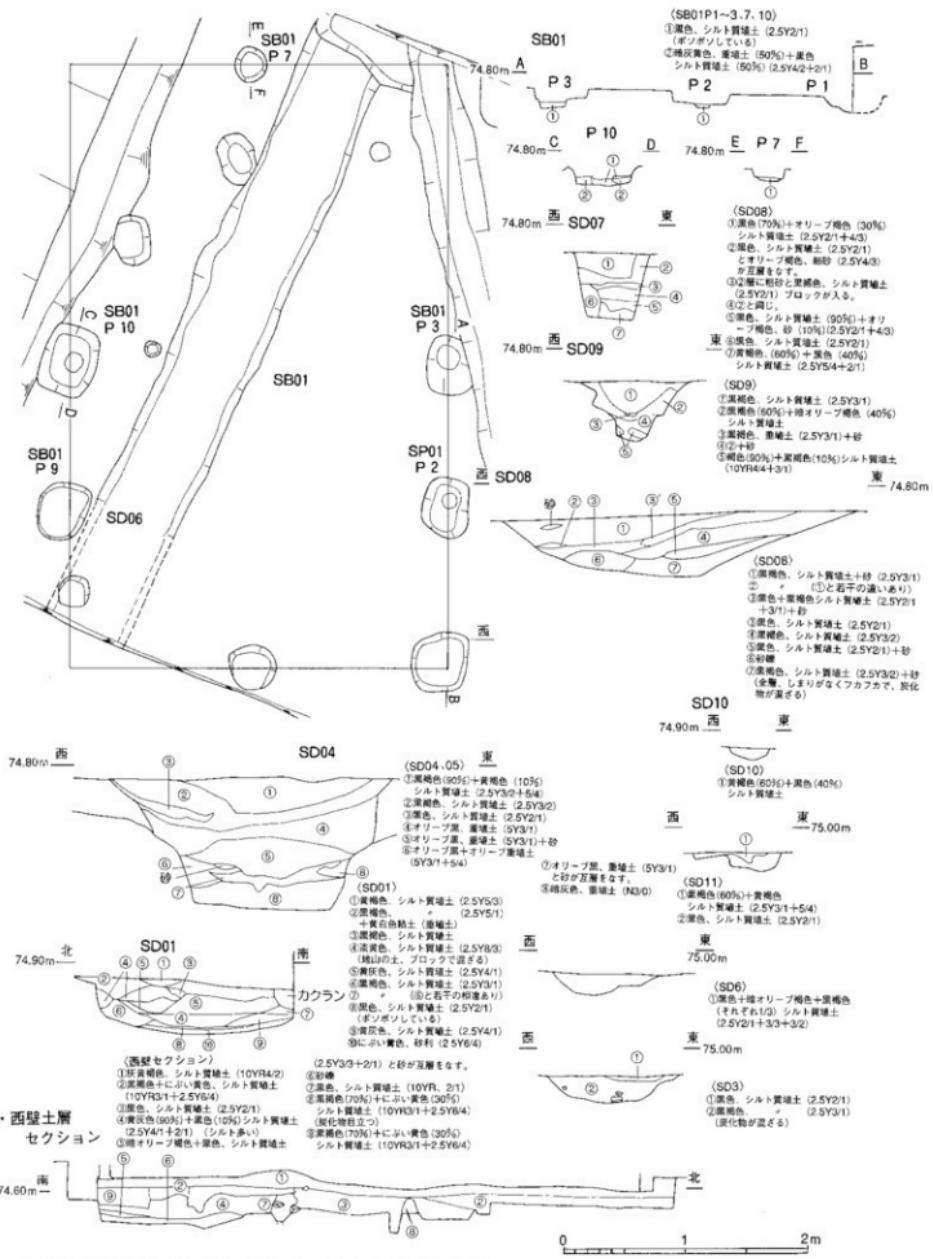
珠洲焼資料館 1989 「珠洲の名陶」



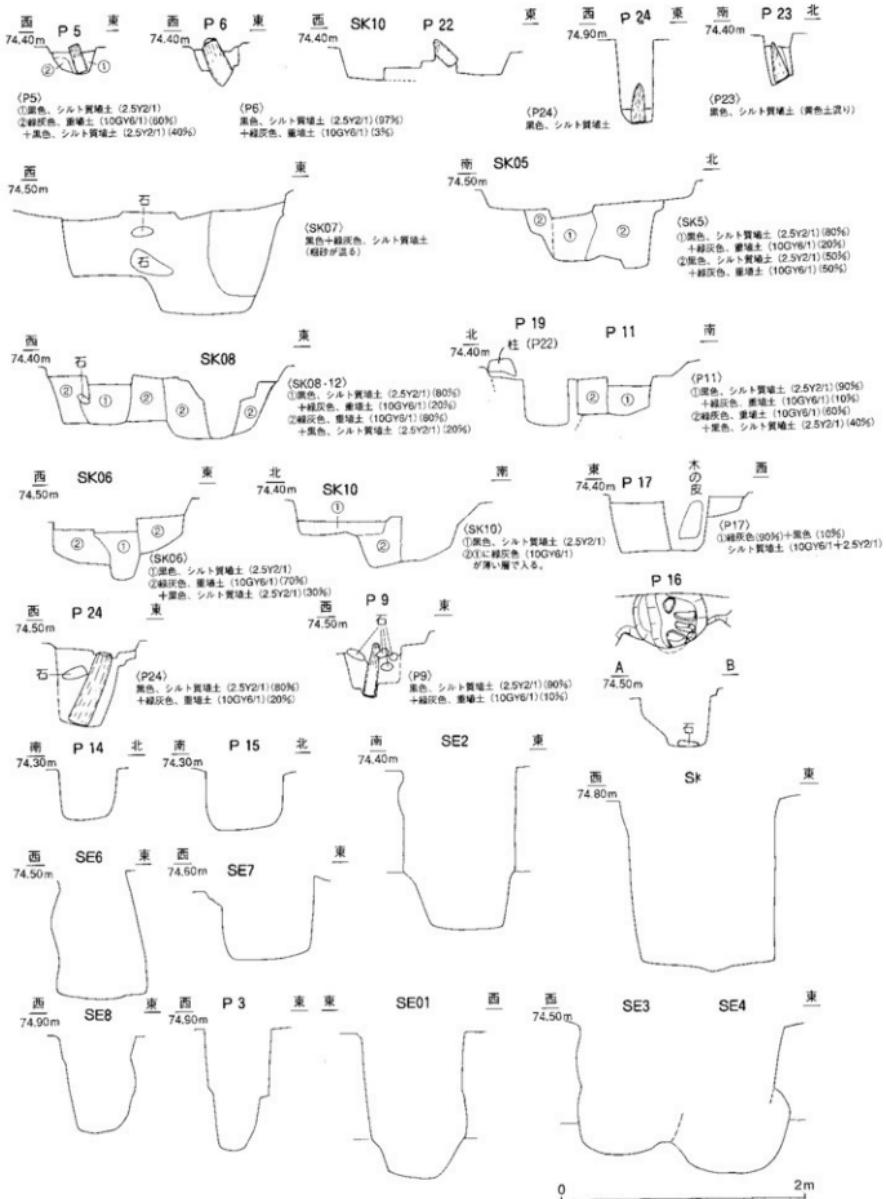
第5図 7地区全体図(1:100)及び遺構断面図



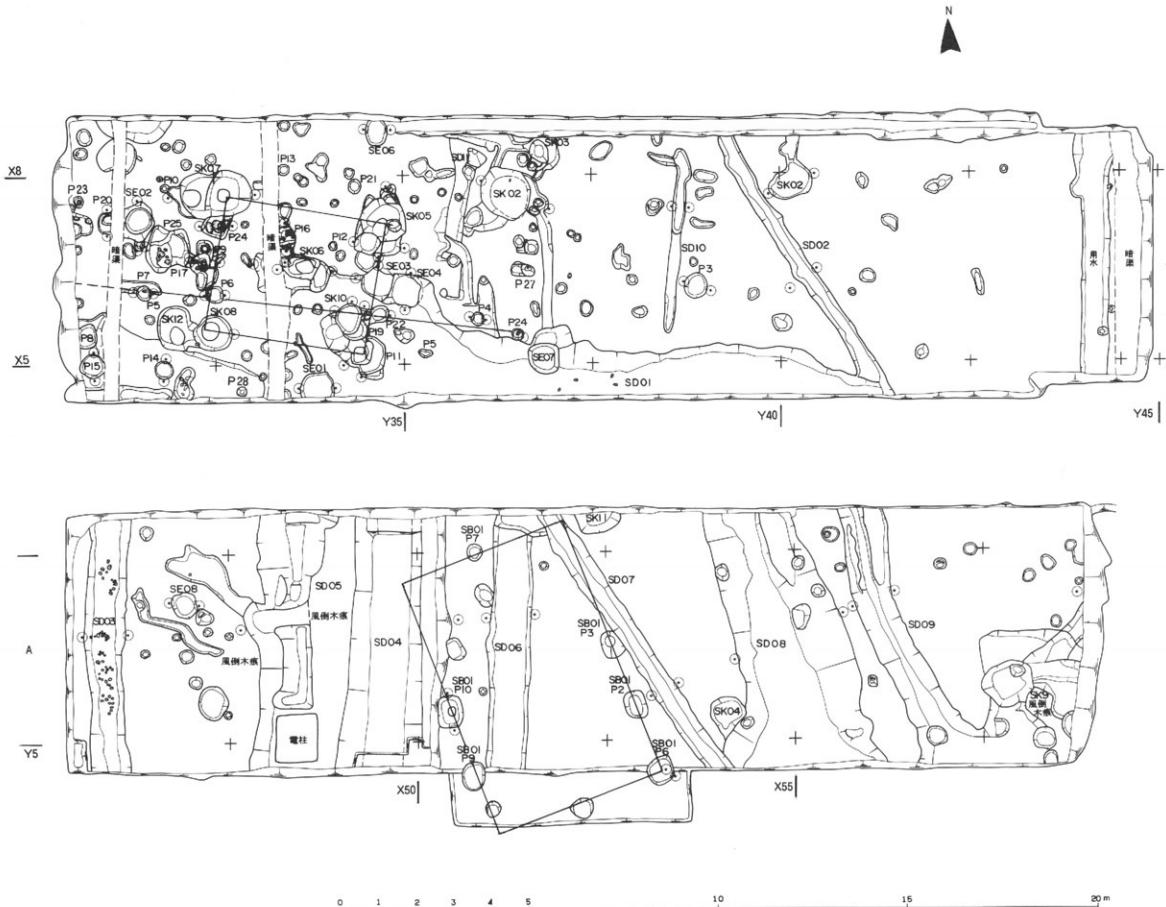
第6図 7地区出土遺物



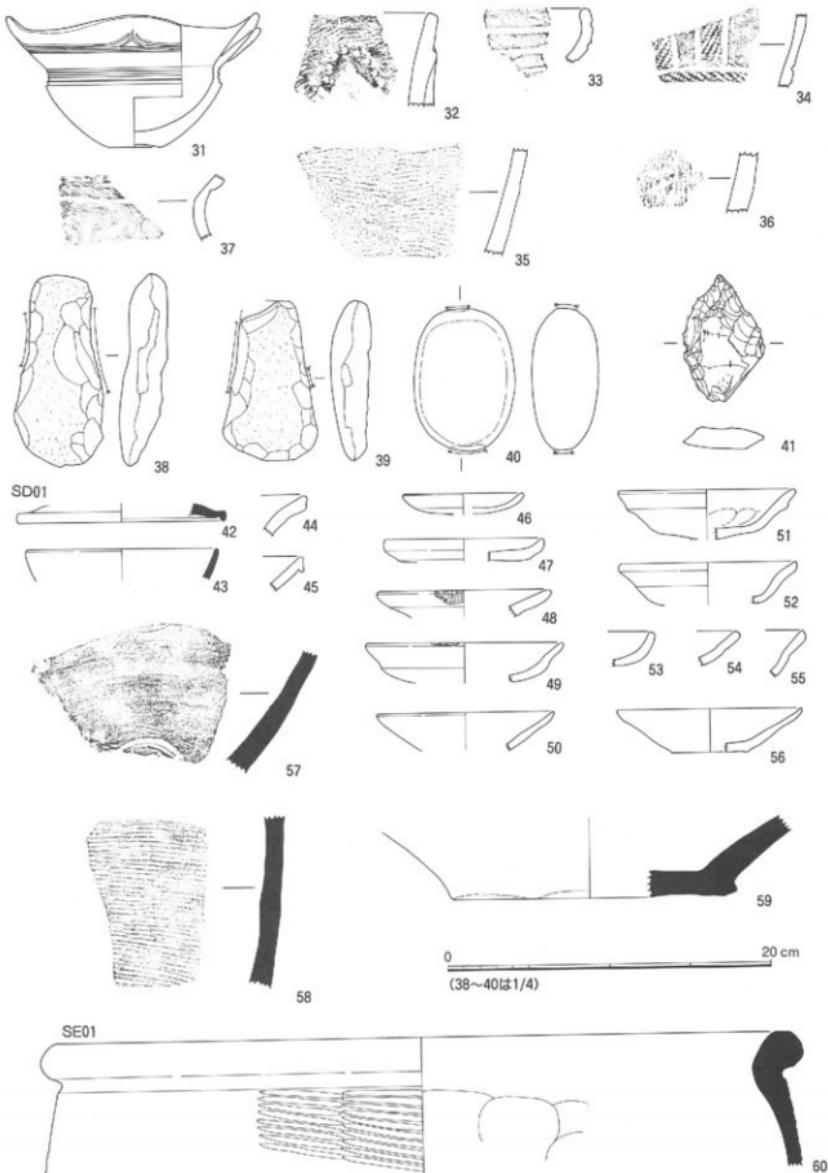
第7図 8地区縦構図(1) SB01・SD01-03・04・06・07・08・09・10・11



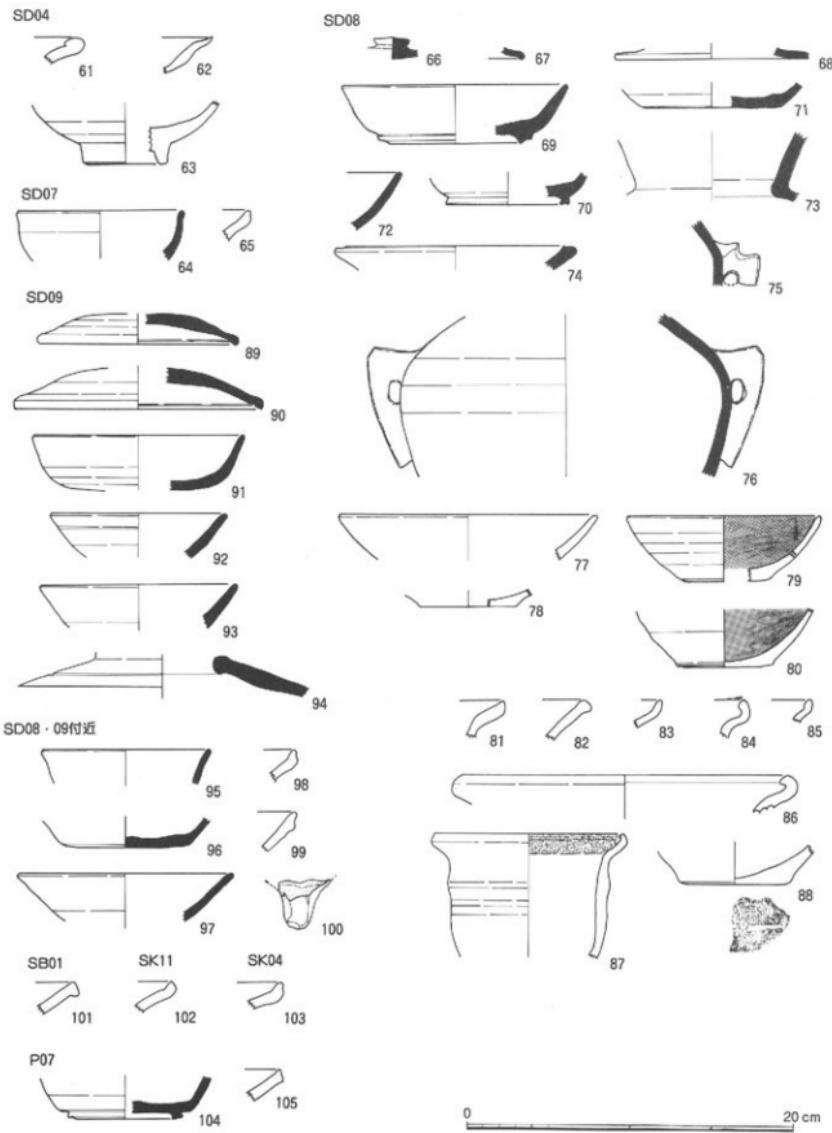
第8図 8地区造構図(2)柱穴・井戸



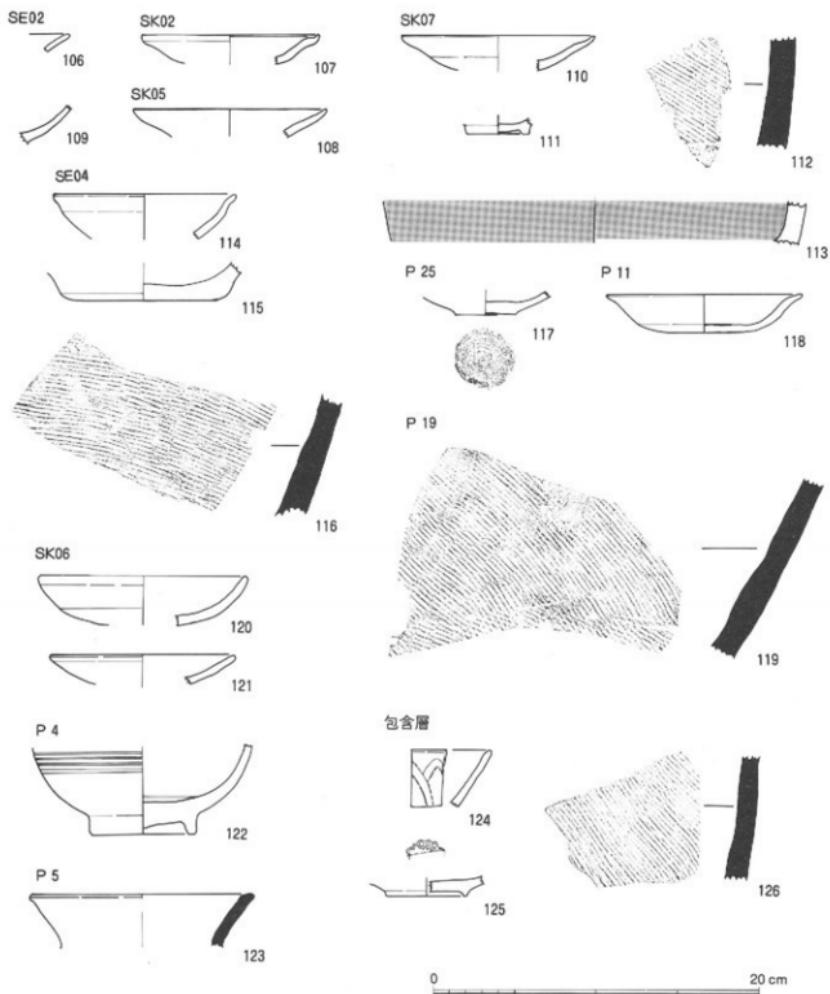
第9図 8地区の造構配置図 (1 : 100)



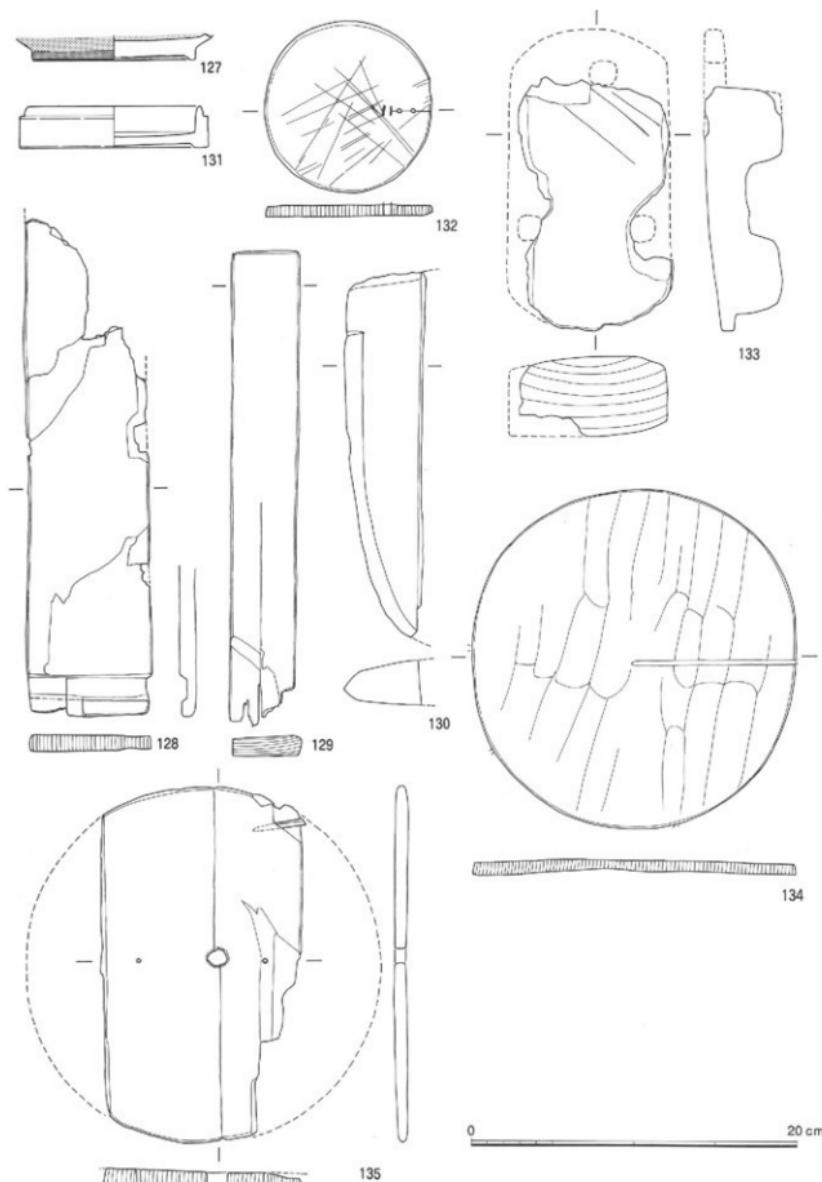
第10図 8地区出土遺物図(1)



第11図 8地区出土遺物図(2)



第12図 8地区出土遺物図(3)



第14図 8地区出土遺物図 (4) SE01(127・128～130), SE02(134), SE04(135), P8(133), P19(131), SD04(132)

図 版

図版 1

7 地区の遺構(1)



1.遺跡遠景(北から)



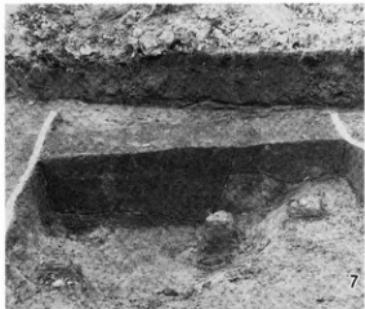
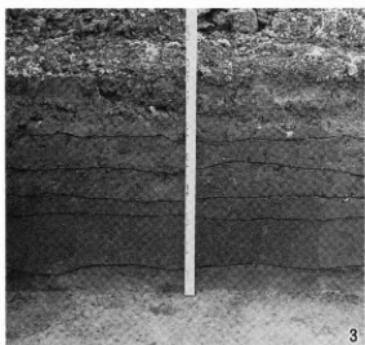
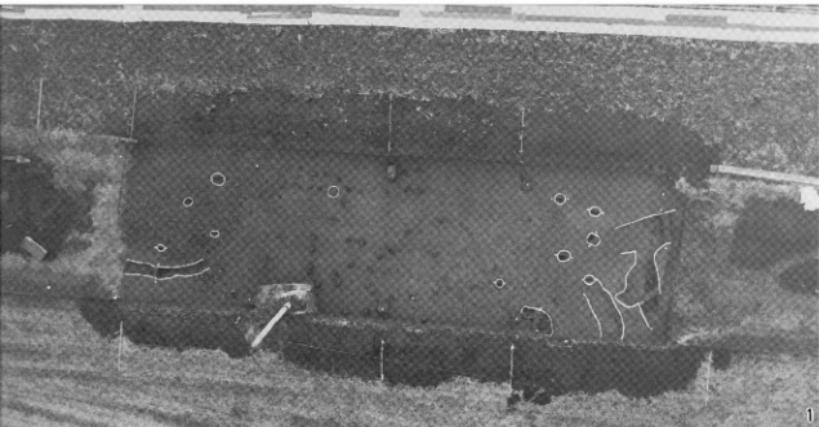
2.近景(東から)



3.近景(西から)

図版2

7地区の遺構(2)



図版 3

8 地区の造構(1)

1. 造跡遠景
(上空北から)



2. 東側近景(東から)



3. 西側近景(西から)



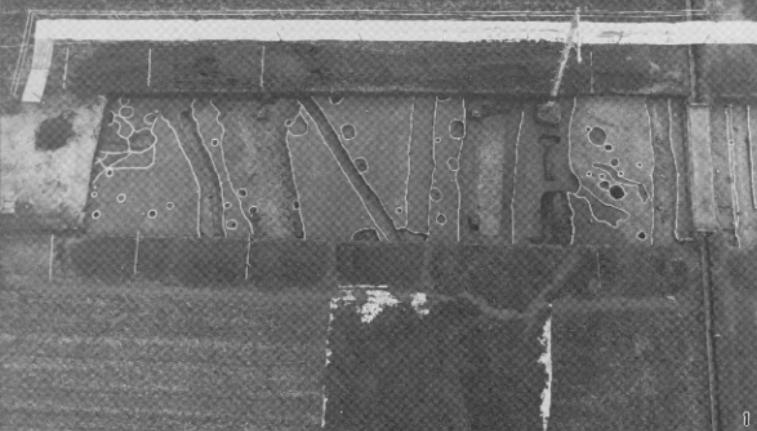
1

2

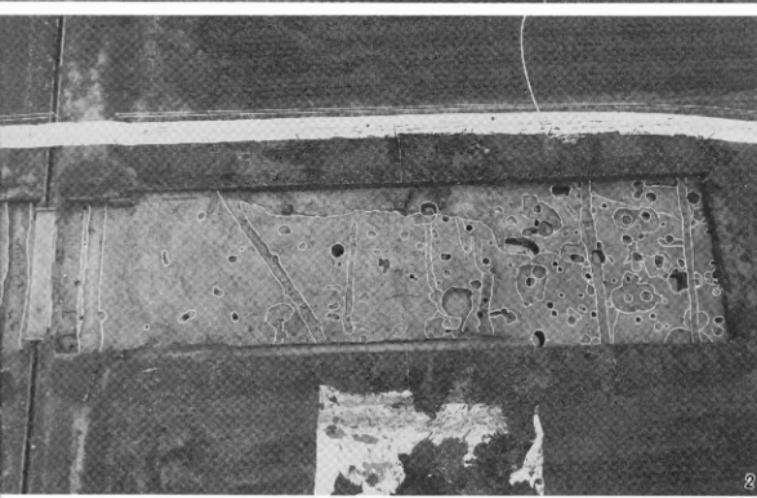
3

図版 4

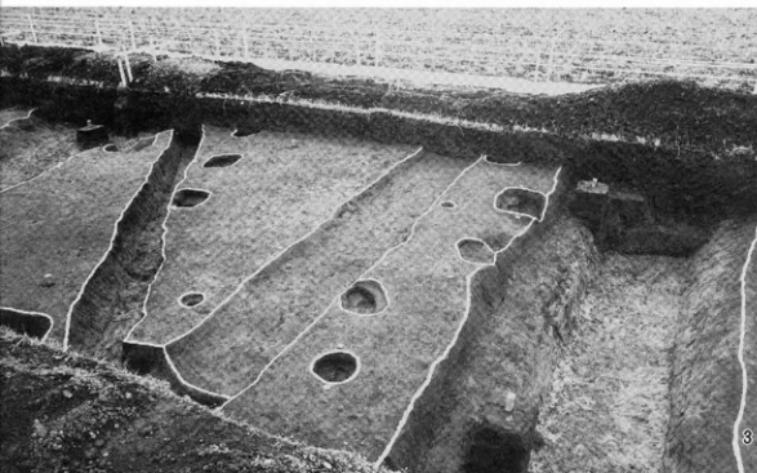
8 地区の造構(2)



1. 東側全景(上空から)



2. 西側全景(上空から)



3. SB01(北から)

図版 5

8 地区の遺構(3)

1. 東側近景(西から)



2. 西側近景(東から)



3. 西側柱穴完掘状況
(西から)



1

2

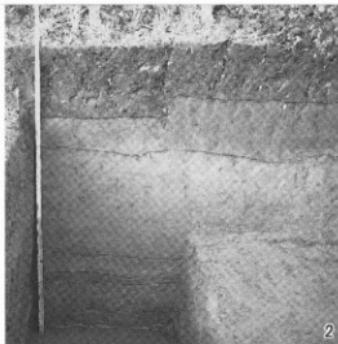
3

図版 6

8 地区の遺構(4)



1



2



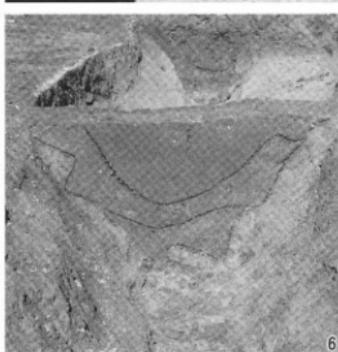
3



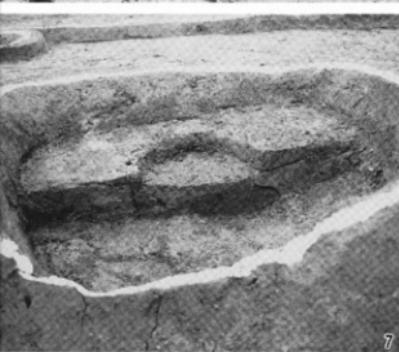
4



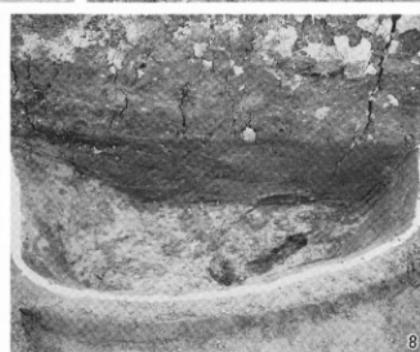
5



6



7



8

1. 調査風景

2. 基本土層

3. 東側の溝群
(北から)

4. SD07の土層

5. SD08の土層

6. SD09の土層

7. SB01・P10
の土層

8. SK11

図版 7

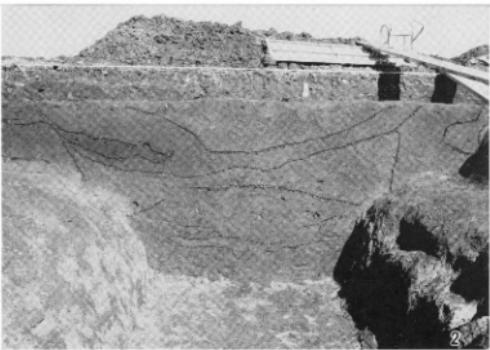
8 地区の遺構(5)

1. SD04木器の
出土状況

2. SD04の土層



1



2

3. SD03(南から)

4. SD01の土層



3



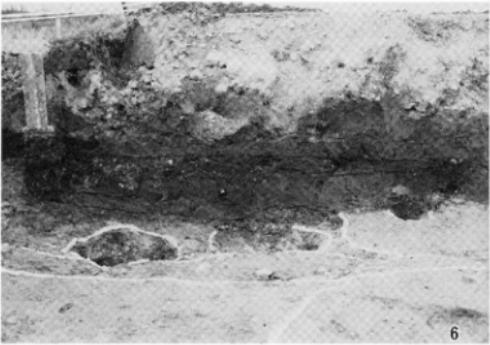
4

5. SD01土器の
出土状況

6. SD01西壁の土層



5



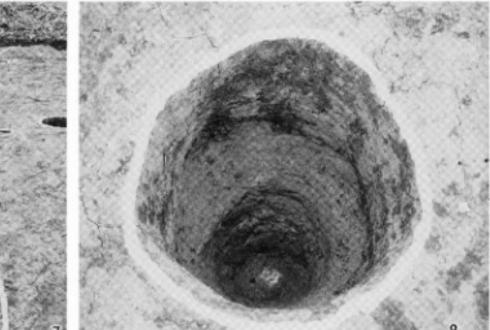
6

7. SD02(南から)

8. P3(井戸)



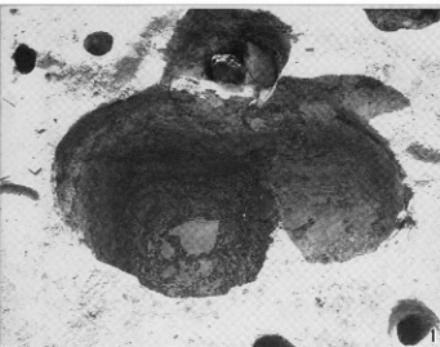
7



8

図版 8

8 地区の遺構(6)



1. SK07・P24
(北から)



3. SK05(東から)
4. P17の柱の皮



5. SK08・12
(南から)
6. P22の柱

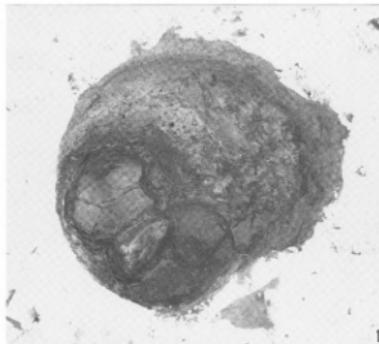


7. SK10・P11・19
(西から)
8. P5の柱

図版 9

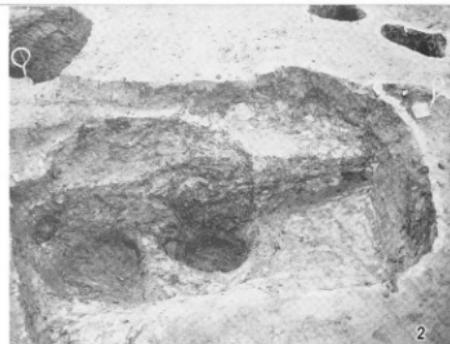
8 地区の遺構(7)

1. P 16の礎石



1

2. SK06



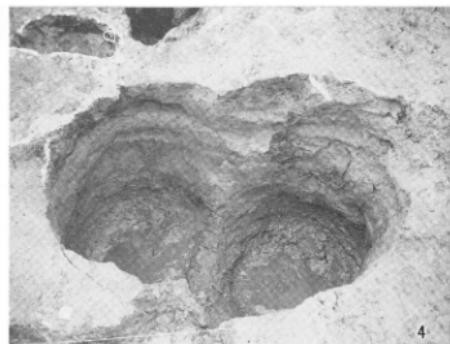
2

3. P 15(東から)



3

4. SE03・04
(南から)



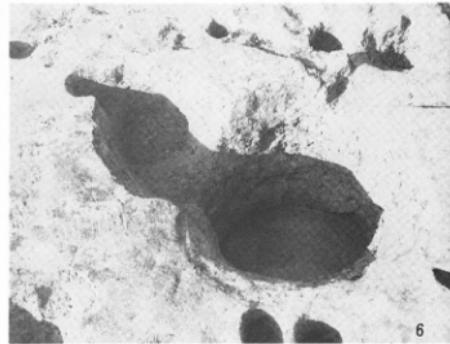
4

5. SE01(北から)



5

6. SK03(井戸)



6

7. SE02(北から)



7

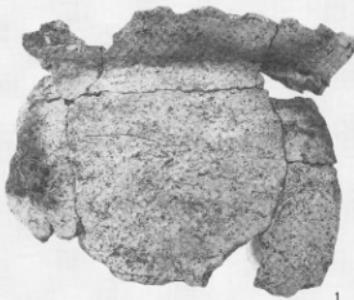
8. SE06(南から)



8

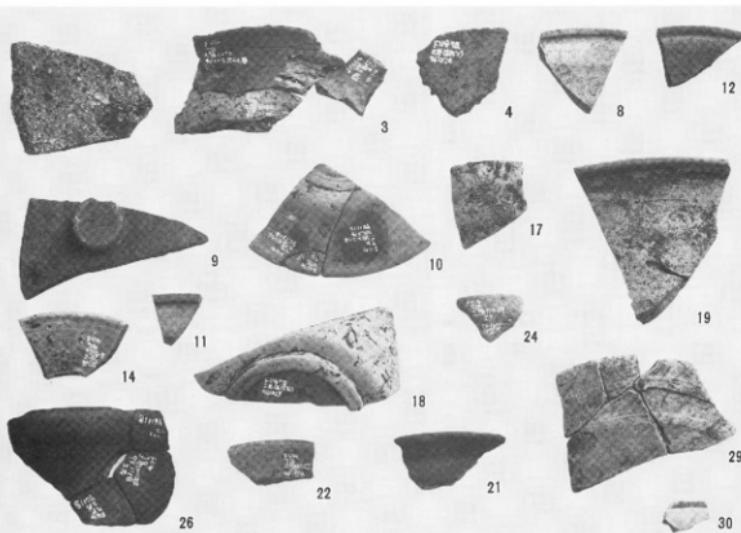
図版10

7地区の遺物

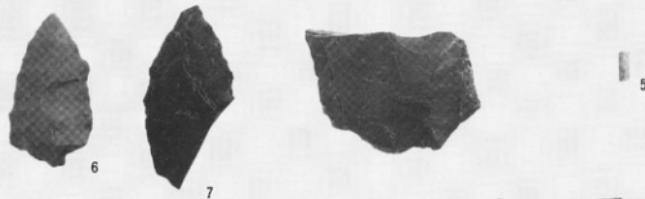


1

縄文土器(1:3)

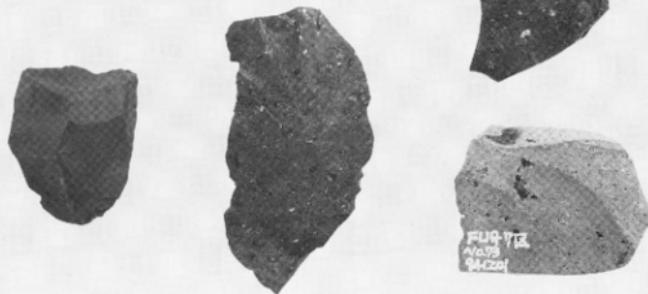


打製石斧・弥生土器
須恵器・土師器
土師質小皿・白磁
(1:2)



5

管玉(1:1)



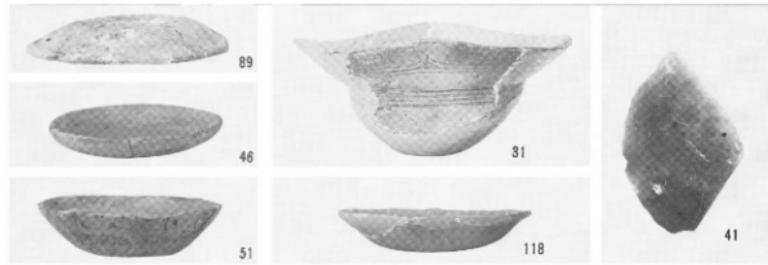
FU-7区
N-3
M-20

石鎌・剝片(1:1)

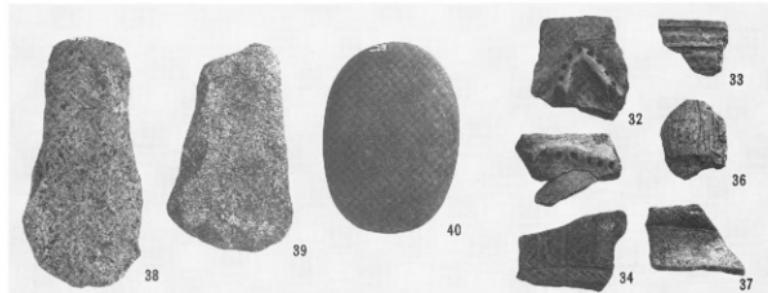
図版11

8地区の遺物(1)

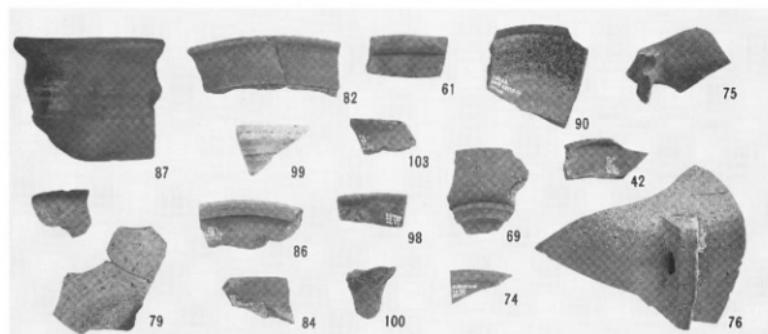
- 左上、須恵器杯蓋(7地区)
(1:3)
左下・中下 土師質小皿
(左下1:2・中下1:3)
中上、縄文土器(1:3)
右、石鏃(1:1)



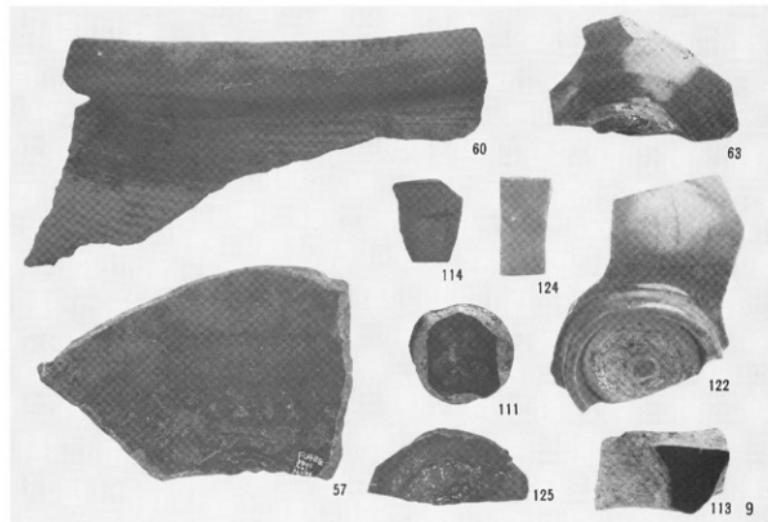
打製石斧、磨石、
縄文土器



土師器・須恵器



珠洲・青磁・瀬戸・美濃
越中瀬戸・瓦器(1:2)



図版12

8地区の遺物(2)

1:3

漆器
柄物
下駄

127

133

132

128

134

柄杓底板
曲物底板

132

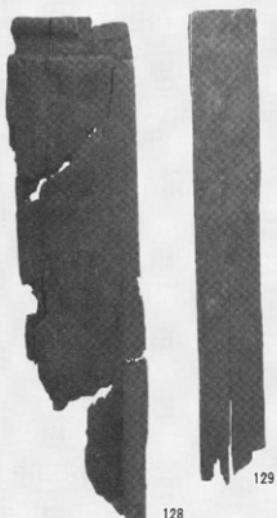
135

蓋

129

130

曲物底板・桶側板
鉢身
頭蓋骨(1:1)



報告書抄録

ふりがな	とやまけんふくみつまちうめはらごまどういせきぐん							
書名	富山県福光町梅原胡摩堂遺跡群II							
副書名	県営一般農道整備事業(田中・梅原地区)に伴う埋蔵文化財包蔵地の発掘調査報告(3)							
編著者名	久々忠義、境 洋子							
編集機関	富山県福光町教育委員会・富山県埋蔵文化財センター							
所在地	〒939-01 富山県西砺波郡福光町荒木1550 TEL(0763)52-1111							
発行年月日	西暦1995年3月31日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ ー ド	北 緯	東 緯	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
梅原胡摩堂	富山県 福光町宗守	市町村 16421	遺跡番号 180	36度 33分 30秒	136度 54分 20秒	19941027 5 19941206	520	県営一般 農道整備事業
所取遺跡名	種別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特記事項			
梅原胡摩堂	集落	縄文、弥生、古代、中世、近世	掘立柱建物、井戸、溝、穴	縄文上器、石器、弥生土器、石鏃、剝片、菅玉、土師器、須恵器、中世土師器、珠洲、越前、瀬戸美濃、青磁、白磁、銅鉄、砾石、木製品、骨片				

県営一般農道整備事業(田中・梅原地区)
に伴う埋蔵文化財包蔵地の発掘調査報告(3)

富山県福光町梅原胡摩堂遺跡群II

平成7年3月31日

福光町教育委員会
編集 富山県埋蔵文化財センター

発行 福光町教育委員会

印刷 日興印刷株式会社

